

大学生の英語表現力に関する一考察

日英語の視点の違いから

橋本 美喜男

A Study of Effective Teaching of English Writing Skills for University Students
From Some Differences of Points of View between Japanese and English

HASHIMOTO, Mikio

大分大学教育学部研究紀要 第41巻第1号

2019年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 41, No. 1, September 2019

OITA, JAPAN

大学生の英語表現力に関する一考察

日英語の視点の違いから

橋 本 美 喜 男*

【要 旨】 本論文では以下の三つのことを述べる。一つは、一見英語に簡単に訳せそうな三つの日本文(1. ここはどこですか。2. 身体を洗った。3. ここには誰もいません。)が、実際にはほとんどの学生がうまく表現することができないことをテストを通して明らかにすることである。二つ目は、適切な英語に表現できない理由を、日本語と英語の視点の違いから考察することである。最後に、この考察を通して、日英語の決定的な違いの一つは、英語は自己を他者化するのに対し、日本語では自己が見えないことであることを、図式化を通して学生に指導することで、上記の誤りを減少させることができる可能性を指摘することである。

【キーワード】 視点の違い

1. はじめに

本論文の目的は、日本語と英語の視点の違いがどの程度大学生の英語表現力を妨げているのかを調べると共に、その結果を踏まえてどのような指導が考えられるかを考察することである。次節では、池上(2006)に基づいて、英語の「自己の他者化」の観点からの英語と日本語の違いについて簡単に述べる。3 節においては、2 節で述べた日英語の違いを反映している三つの日本文の例を使用し、どの程度大学生が理解できているのかを調査した。4 節においては、3 節の結果を踏まえ、考察を行う。

2. 本論で扱う日本語と英語の視点の違いについて

日本語と英語の視点の違いについて扱っている論文や書籍は多い。2010 年以降に限っても廣瀬ほか(2010)、本多(2013)、濱田(2016)、尾野(2018)等を挙げることができ、扱われている範囲も広い。

本論では、理論的な細かい差異については扱わず、主に池上(2006)の「自己の他者化」に焦点を絞り、そこから生じる日英語の差を扱う。具体的には、以下の三つの例文が示すものであ

る。1b と 2b と 3b に示されている英文は、それぞれの日本語の文に対応する表現である。

- 1 a. ここはどこですか。
b. Where am I? (池上 2006: 184)
- 2 a. 身体を洗った。
b. I washed myself. (池上 2006: 183)
- 3 a. 誰もいません。
b. Nobody's here except me. (池上 2006: 186)

例文 1 は自分の居場所を尋ねる表現である。池上(2006)が述べているように、英語では「話し手は自分の居場所を聞くのに、誰か他人の居場所を聞くのと同じ構文で——つまり “Where is she?” と同じ構文」を使用している。一方、日本語では、「<自己>は知覚の原点として知覚の対象にならず、したがって、発話の中で言語化されない」と記述されてある。

例文 2 は、英語の例において目的語の位置に自己が現れる例である。この例において、「他者に向けてなされる場合の言語化(I washed the baby)と同一であり、再帰代名詞は話し手が<自己>を<他者>として受け止めている」と考えられている。日本語においては、例文 1 と同様に自己は現れず、視界に入る人体部位のみが言語化されている。

例文 3 は、英語の例において前置詞の目的語の位置に自己が現れる例である。英語の例には、対応する日本語には現れない “except me” が現れている。この例も、「話し手は自己の分身を部屋の外に立てて、その視点から部屋の中にいる自分をも客体化」している。日本語は例文 1 と 2 同様に、自己は客体化されず、言語表現には現れない。

三つの英語の例文に共通しているのは、英語の話し手は、自分を他人のように見ているかのように客体化して捉えていることであり、これを「自己の他者化」と池上(2006)は呼んでいる。他方、日本語では知覚の原点としての自己は視界に入らず、従って言語表現にも現れないと言える。

以上述べた、英語と日本語の自己の捉え方の違いから生じる視点の違いがどの程度、大学生の英語表現力に影響を与えているのかを次節で考察する。

3. 大学生の英語表現力について

本節では、第 2 節で述べた日英語の視点の違いがどの程度大学生の英語表現力を妨げているのかの調査結果を示すと共に、その結果に基づく考察を行った。

調査対象は、大分大学教育学部に 2019 年の 4 月に入学した一年生のうち、筆者が担当する「総合英語」を受講した学生 74 名(2 クラス：クラス A 37 名、クラス B 37 名)である。各クラスに一名ずつ過年度生がいるが、昨年度以前の私の講義を聴いている可能性があるので、除外した。

4 月の第一回目の講義時に、2 節で扱った三つの日本文を英語で表現できるかどうかで、大学生の英語表現力を観察した。

扱った三つの日本文を以下示す。

- 4 a. ここはどこですか。 (= 1a)
 b. 身体を洗った。 (= 2a)
 c. (ここには)誰もいません。 (= 3a)

この三つの日本語を黒板に書いて提示し、どのように日本語の意味を英語で表現できるか学生に問いかけた。辞書等を使わず、テスト形式で 5 分程度の時間をかけて行った。三番目の例に関しては、英語に表現しやすいように、池上(2006)にはなかった“ここには”を付け加えた。

簡単そうな問題文であったが、結果は以下の通りになった。

表 1

問題	正解	誤答
ここはどこですか。	5 名	69 名
身体を洗った。	6 名	68 名
ここには誰もいません。	0 名	74 名

この三つの日本語に対する英語表現の正解とする基準は、4a と 4c の問題文においては、一人称代名詞が使用されているかであり、4b においては一人称の再帰代名詞が使用されているかである。時制や主語と動詞の一致等が仮に間違っているとしても、一人称代名詞や再帰代名詞が使用されていたら、正解にした。このような基準にしたのは、ここで問題にしている日本語と英語の違いは、英語は自己を表現するのに対し、日本語は自己を普通の文脈では表現しないことであるからである。従って、4a の日本語の英語表現としての正解例としたのは以下の二つである。右側の数字は解答した学生の数である。

- 5 a. Where am I? (4 名)
 b. Where are we? (1 名)

居場所を尋ねる簡単な表現であるが、正解できた学生はわずか 5 名、パーセントにすると約 6.7% である¹⁾。では、残りの学生はどのような誤りをしたのであろうか。以下、主な誤答例を挙げる。5 の例と同様に、右側の数字は解答した学生数とそのパーセントである。

- 6 a. Where is here? (40 名 54.0%)
 b. Where is this? (9 名 12.2%)
 c. Where is this place? (6 名 8.1%)
 d. Where is there? (4 名 5.4%)

誤答で一番多かったのは、日本語をそのまま英単語に変換し、英語の語順に替えた“Where is here?”で、半分以上の 54% の学生がこのように答えた。日本語と英語が一对一に対応しているという捉え方が学生の考えにあるように思われる。その他の答えも、“here”が“this”や“this place”や“there”に替わっただけであり、日本語と英語の視点の違いに気がついていないため、このような間違いをおかしていると考えられる。

次に 4b の問題文に移る。この問題文の正解としたのは、再帰代名詞が使われている以下の二つの英文である。かつこ内の数字は正解した学生数とそのパーセントを表している。

- | | | | | |
|---|----|-----------------|-------|------------|
| 7 | a. | I washed myself | (=2b) | (4 名 5.4%) |
| | b. | I wash myself | | (2 名 2.7%) |

7b は時制が間違っているが、再帰代名詞を使用しているなのでここでは正解にした。主な誤答例を示すと以下の通りである。

- | | | | |
|---|----|-------------------|--------------|
| 8 | a. | I washed my body. | (38 名 51.3%) |
| | b. | I washed body | (31 名 41.8%) |
| | c. | Body washed. | (2 名 2.7%) |

8c を除いて、この誤答では主語に一人称代名詞が使用されてはいるが、洗う対象が日本語の影響を受けて“(my) body”と表現されている。日本語は、見えの対象として“身体”を言語化する。一方、英語では対象も客観視するので再帰代名詞を使用して表現する。この違いが理解できていないので、ほとんどの学生が再帰代名詞を使って表現することが難しいと思われる。

最後に、4c の問題文について述べる。4c の正解例は以下の通りであるが、一人称代名詞がある句 “except me” を使用した正解者は一人もいなかった。

- 9 Nobody's here except me. (= 3b)

一人も正解者がいなかったのは予想外であったが、主な誤答例は以下の通りである。

- | | | | |
|----|----|---------------------|--------------|
| 10 | a. | Nobody is here. | (26 名 35.1%) |
| | b. | No one is here. | (26 名 35.1%) |
| | c. | There is no person. | (4 名 5.4%) |
| | d. | Here isn't anyone. | (2 名 2.7%) |

他にも“誰もいない”を表すのに、“There is no one.” “There isn't anyone” “Here isn't anyone.” など様々なバリエーションが存在したが、共通しているのは、“私以外”に対応する表現である “except me” が抜けていることである。

上記の日本語を英語に表現させるテストを通して、ほとんどの学生は自己を表現する英語表現を適切に答えることができないことが分かる。

4 考察とまとめ

問題にした日本語表現は非常にシンプルな表現であるにもかかわらず、ほとんどの学生は適格な英語で表現することができないことを前節で示した。この結果が示していることは、単に日本語訳を通して英語表現や英単語を理解して暗記をしても、前節で扱ったような簡単な表現

も英語で適切に表すことができないことだと思われる。この問題を解決する方策の一つとして、日本語と英語の視点は異なることが多いことを明示的に学生に指導することであると思われる。

そこで、第2節の内容を以下のように図式化し、学生に説明した後、なぜ日本語と英語の表現の仕方が異なるのかについて理解できたかどうかを調べるため、アンケート調査した。本節ではその結果等を述べる。

2節で扱った日本語と英語の違いを図式化すると以下のようになると思われる。

図 1

日本語

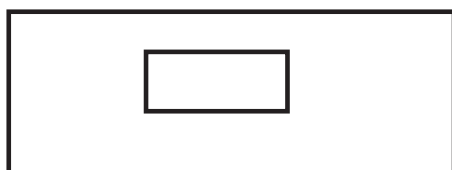
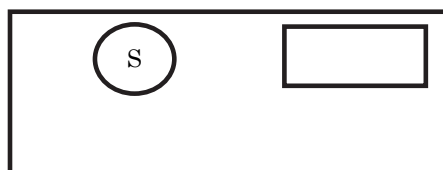


図 2

英語



上記の図は Langacker (2008)のステージ・モデル(stage model)を、大学生にも分かりやすくするために、大幅に簡略化したものである。しかしながら、ここで問題になっている日本語と英語の視点の違いは明確に示していると考えている。

いちばん大きな長方形はステージを表し、この場で生起する出来事を観客席にいる話し手(丸で囲まれている S で表されている)が言語化する。小さな長方形は対象を表している。ここにおける日本語と英語の決定的な違いは、英語の図式のステージに話し手(話し手の分身)が存在していることである。この「話し手の分身」の存在が、英語では自分を客観視して表現していることを示している。学生には、以下の例を使って具体的に説明した。

- 11 a. お腹がすいた。
- b. I'm hungry.
- 12 a. リンゴが好きだ。
- b. I like apples.

日本語では、図1が示しているように対象のみがステージ上にあり、言い換えると対象だけが見えている。よって通常の文脈では対象のみ(お腹やリンゴ)が言語化されるが、自己は見えないので表現されない。一方、英語では図2が示しているように、ステージ上に自分の分身と対象が存在し、そのため、その分身が一人称代名詞「I」と表現される。ステージ上に自分の分身が存在することが、日本語には通常現れない自己が英語には現れる理由であると10分ほどかけて説明した。

このような説明をした後、なぜ以下の三つの英文に一人称代名詞や再帰代名詞が現れるのか理解できたかをアンケートの形で聞いた。

- 13 a. Where am I?
 b. I washed myself.
 c. No one's here except me.

アンケートは、全く理解できなかった、少し理解できた、だいたい理解できた、よく理解できた、の4段階のスケールで聞いた。結果は以下の通りである。

表 2

	人数
全く理解できなかった。	0 名
少し理解できた。	22 名
だいたい理解できた。	41 名
よく理解できた。	5 名
無回答	1 名
欠席者	5 名

また、説明に対するコメントも書いてもらった。主なコメントを以下に挙げる。

- 14 a. 日本語と英語の考え方の違いは理解できたが、それを文章にどう表していいかが理解できるものと理解できないものがあった。
 b. 自分をステージ上にのせて客観的に見るように英語では話すというところから **except me** や **myself** を使うというのが分かりやすかった。
 c. 日本語の説明の仕方が難しい。
 d. 以前と違った視点で考えることができた。
 e. 例文を見てどうしてそうなるのかはだいたいわかるけれど、自分で例文のような文章をつくれるかわかりません。

本当に理解したかどうかは別問題ではあるが、「だいたい理解できた」と「かなり理解できた」と回答した学生数を合計すると 46 名になる。このアンケートの結果が示唆していることは、英語の単語や表現のみを日本語訳を通して教えるだけではなく、日本語と英語の捉え方の違いに注意を向けさせ、なぜ同じ出来事を異なる方法で英語では表現するのかを理解させることは効果的であることだと思われる。ただ、学生のコメントの 14a と 14e から分かるように、日本語と英語の視点の違いが分かることが直ちに実際に英語で適切に表現できることに結びつかないことが指摘されている。理解とその応用をどのようにつなげるのかが今後の課題である。

注

- 1) パーセントの数字は小数点以下 2 位を四捨五入した数字である。以下も同様である。

参考文献

- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』 大修館書店, 東京.
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店, 東京.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』 日本放送出版協会, 東京.
- 尾野治彦 (2018) 『視点の違いから見る日英語の表現と文化の比較』 開拓社, 東京.
- 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』 講談社, 東京.
- 金谷武洋 (2003) 『日本語文法の謎を解く』 筑摩書房, 東京.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- 橋本美喜男 (2018) 「英語の時制と相の指導に関する一考察」『ことばを編む』 西岡宣明ほか(編), 380-388, 開拓社, 東京.
- 濱田英人 (2016) 『認知と言語』 開拓社, 東京.
- 廣瀬ほか (2010) 『日本語から見た日本人』 開拓社, 東京.
- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』 研究社, 東京.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大学出版会.
- 本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学』 開拓社, 東京.
- Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
- 辻幸夫(編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』 研究社, 東京.
- 宗宮喜代子 (2012) 『文化の観点から見た文法の日英対照』 ひつじ書房, 東京.

A Study of Effective Teaching of English Writing Skills for University Students

From Some Differences of Points of View between Japanese and English

HASHIMOTO, Mikio

Abstract

This paper shows the following three points. First, most of the university students who attend my English classes could not translate the three Japanese sentences below into English.

- 1 Koko wa doko desuka. (Where are you?)
- 2 Karada wo aratta. (I washed myself.)
- 3 Kokoni wa daremo imasen. (Nobody's here except me.)

Therefore, it is necessary to consider the question of why the students cannot express the above Japanese sentences properly in English. The paper points out that some differences of points of view between Japanese and English may make it impossible for them to express the Japanese meanings. Finally, the different perspectives between them are explained so that they can be understood by the Japanese students. After that, students' opinions about the explanation are obtained by means of a questionnaire and then the paper considers the effectiveness of the explanation.

【Key words】 Differences of Points of View